



町内にある津波記憶石は、彫刻家の前田耕成氏が「女川町の大切なもの」「女川町の宝物」をイメージしデザイン。女川中学校卒業生の言葉も刻まれている。女川港を望む、海拔18m（津波到達地点）の場所に立つ



震災前の地盤の高さから復興事業で造成した地盤の高さまでのスロープを設置し、交番を囲う壁に被災状況などをパネルで展示。まちづくりの過程も紹介しており、困難に立ち向かった人々の様子を伝えている



10年以上が経過し、遺構には植物が生えている。人工物の旧交番が劣化していく一方で、正反対の自然物である植物は成長していく様子を、震災から活気を取り戻していく町、顔を上げて前を向く人々の姿が重なる

●おながわちょう
女川町

東日本大震災遺構 旧女川交番

建物も地盤も当時のままの「見守り保存」



最大震度 6弱

浸水面積 3km²

最大浸水深 19.98m



全壊 2,924棟

半壊 349棟

一部損壊 661棟



死者 615人

行方不明者 257人

負傷者

※被害状況のデータについては、注釈がないものはP.11下段に記載の資料に準拠
※空欄または「不明」としているものは準拠資料の通りに掲載

鉄

筋コンクリート2階建てだった女川交番は、津波の引き波により基礎部分の杭が引き抜かれ、横倒しに。津波の襲来時警官2人は避難誘導のため交番にはおらず、無事でした。町はこの交番を遺構として保存することを検討。町民の気持ち、遺構の学術的な価値、新しいまちづくりの中での位置づけ、維持管理上の問題などを総合的に判断し保存を決め、2020年から公開しています。

あえて時間とともに劣化していく姿を容認する「見守り保存」という手法で保存しているため、建物正面の壁がなくなり、基礎部分がむき出しになった様子も震災当時のまま見学できます。また、女川町では防潮堤を造る代わりに土地全体をかさ上げし、住宅は高台に移すことで津波から命を守るまちづくりを実践。旧女川交番は地盤の高さも震災前のままなので、かさ上げをした周囲の土地との高低差を体感できます。

震災遺構

車椅子OK

施設DATA

●ひがしにほんだいいんさいこう きゅうおながわこうばん

東日本大震災遺構 旧女川交番

☎ 0225-24-8118(女川みらい創造) MAP P114D3

📍 女川町海岸通り1

🚶 JR女川駅から徒歩5分

👁️ 見学自由

🚌 あり(大型バス:あり)

考えてみよう

Q1 震災当時のまま保存し、あえて時間とともに朽ちていく姿も見てもらおうとしている旧女川交番。除草作業をしていないため、所々に植物が生えています。この植物には、どんな意味があると思いますか？



A1 「復興」や「再生」という明るい未来の象徴。破壊された人工物(遺構)と対比させ、自然物(植物)の成長を見ている。